Katz Awa

By E. Warren Clark
（当館職員訳）

序章

「カツ・アワとは何者ですか？」私がそう聞かれたとする。
「その人はキリスト教徒ですか？」いいえ。
「われわれと同じ文明に生まれた人ですか？」いいえ。
「その人の貢献が、教会や大学、図書館においてなにかみられますか？」いいえ。
「キリスト教徒でも、西洋一般における意味での文明人でもない。人並優れた身体も、栄光ある軍歴も持たない。伝承される古典的人物でもない。そのような人が、一体なんだというのですか？」
お答えしよう。先ず何よりも彼は、私が人間的に愛する人である。私が個人的に誰よりも、感謝と尊敬の念を抱く人である。私がこれまでに会った、異教徒とキリスト教徒の偉大な人々の中で、誰よりも。

私がカツ・アワをこれほど愛するのはおそらく、私が彼をそれほどよく知っているからだ。彼が敬っていた先祖たちの元へと逝って数年を経た今、彼が東京の隠宅で最後に私にくれた許可、私が彼の人生のささやかなスケッチを描くことを許してくれた特権が、私にはある。

これは伝記ではない。彼のシンプルな生涯を、シンプルに述べるだけだ。富ではない価値のために、費やされた生涯。描かれる事実において、彼が真剣に求めてやまなかったものは、物質的財産目録に載ることはない。その生涯の痕跡は彼の愛する祖国に残されると同時に、その国を通して世界に残されたのである。
「でも、キリスト教徒ではありませんよね」そう言われるだろう。
その通り、キリスト教徒ではない、その人のうちに、私は卑しきナザレ人の本質的人間性を見た。それ以上のものを私は、これまで世界を三周はしているが、世界の他のどこでも見たことはない。

カツ・アワの温和、忍耐、語ることなき自己犠牲、不人気で誤解を免れない信条への献身。危難には勇敢に、苦難には無言で。自らの命を惜しまず、統率にぬかりはない。それら特性は最初から示していたのだ。「一日にして生まれる」という予言によってはっきりと運命づけられた一つの国の、再生を担う者たちの中で彼が、最も特筆すべき存在となることを。

全能の神は異教徒キュロスに告げた。「汝は私を知るまいが、汝に権力を与えたのは私だ」。その知られざる神に彼、カツ・アワ（以下、勝安房）は望みもしないままに仕えた。彼は認め、そして享けた。その無限の美と恵みを。死を前にして、神の一瞥を与えられた時に。この神の方法は、過去においても見出すことができる。神は疑いなく彼を使役していたのだ。古くはキュロスを使役したように。でなければ、我々はマルスの

丘における聖パウロの告白の精神を解釈し損ねている。
「ですが我々の文明が生み出したのではない人間が、真に偉大たりえるのでしょうか」。あなたのその問いに、私はためらうことなく答えよう。「イエス」と。

1854 年に機略と礼節をもって我がペリー提督が日本の閉ざされた扉の閂を外した時、そこには我々が“開放”の言葉の内に夢見ていた以上の意味があった。下って 1871 年、我々三人のアメリカ人教師、すなわち我らが文明と呼ぶものの先駆者たちは、日本において互いに 300 マイル離れた別々の土地で、その隠された事実を同時に発見した。まさに封建時代の幕引きの時であり、我々はそれぞれの地で一年以上、白い顔を見ることも、聞きなれた英語の音を聞くこともなく暮らした。

鉄道、電信、ビーフステーキから隔絶した場所で、我々が少なくとも知り得た事。それは、古い日本には多くのものがあり、その中には我々もまた希んでやまない良質なものが、すなわち社会的物質的な意味での品行方正さが、その存在をまず疑えないものとしてあるということだった。勝安房が我々三人の内二人を、それぞれ東海岸・西海岸の離れた州に住まわせ、相談に乗り、我々を励ました人だった。静岡、そこは“大君制のセントヘレナ”だったのだが、私が住むのに手頃な家がその地になかった時、彼は権大参事、すなわち知事に話して、大きな仏教寺院を生活の場として提供してくれた。後に、徳川家達（今の貴族院議長）の名によって、彼は私のためにお金をかけた立派な石造りの家を、お城の堀端の隅に建ててくれた。そこに私は宮廷の様な調度品をそろえたのだが、それが彼自身や往時の大君の住まいにもまして、快適だったのは確かである。その種のものとしてこの国で建設された最初の家、その上に二つの旗が翻った。それはかつての家康の城の堀端で巨大に成長した二本の松の木から吊り下げられた。

日本人は我々の国旗を“花の旗”と呼び、我々の星と彼らの太陽の旗とが対になって、両者同じ一つの運命を示しているのだと言った。[この適合を私はつい最近も目にした。ミカドの義兄弟である伏見宮を表敬した折り、彼はニューヨークのセント・レジス・ホテルに逗留していたが、そこには旭日旗と星条旗が並んで揺れていた。商業会議所が宮をもてなすためにしたことで、両国の商業上の利益は同じですよということだ]。

私の目が一つの文明、我々のものと対等ではないが、より古い文明に対して“開かれた”のは、古い仏寺に住んだ時だった。保守主義者たちが、彼らの元へ私が来たことを“白き禍”と呼んだことに対し、私は無邪気に微笑んだものである。

苔むした寺に隔離され、松林、桜の花、お堂とお墓、それら詩的美の中に身をおいて、実際は平和で穏やかなものだった。

私は二つの大陸で三つの神学団体に参加してきた。だが私はこの場所でこそ、黄金の法則の最もよき洞察、および最も美しい解釈を得ていたのだった。夕方になると厳粛に、ゆっくりと響く大きな青銅の鐘。その響きにさえ、主調への優しさがあった。羽のような竹の梢を吹き抜ける風のそよぎは、まるで澄み切った平和の新たな調べをささやいているようだった。そう、私はそこで、それ以前には優しさという言葉の意味になかった

ことを知ったのだった。感謝の念と従順さは新たな意味をもった。敬うこと、尊ぶことは、アメリカの大学での荒々しい“乱闘”や新人いびりの中から出て来たばかりの者にとって、一つの啓示だった。親孝行や上位者への敬意は、“Prex 学長さん”、the“old man じいさん”といった大学のスラングに慣れた者にとって、全く目新しい特質だった。私が受け持った六百人の生徒の中に、敬意ある挨拶なしに私に接した者は一人もなく、贈り物や感情と感謝の徴に関しては、私はただただ圧倒されたのである。

私の通訳の下條は、東京の大久保知事の十歳の息子同様に私と同居していたが、彼は“Stonewall Jackson”（日本人が持った最初の鋼鉄艦）に体当たりされた艦が函館港に沈んだ時に、その艦上で腹を切った日本の提督の息子だった。

下條は私が会った日本人の中で最も洗練された人だった。上品に整った顔立ち、非の打ち所のない服装、そして作法はチェスターフィールドのそれだった。しかし彼の脆弱な体には、獅子の心が宿っていた。彼が私との関係のために一身上の危険をかえりみなかったことは一度や二度ではない。私が内々で最初のバイブルクラスを開いた時、生徒たちは自主参加で、私は寺の僧侶さえ招いていたのだが、クラスを手伝ったことで彼は身内から命を脅かされたのだった。（生徒全員がお寺の畳の上に座っていた、そのバイブルクラスは後年、日本における最初の自主財源の教会となった。今は説教壇も座席もあり、7000 ドルのコストで、日本人の牧師一人を賄っている）。

彼の顔が美しい輝きを放つのは、私が福音書について話すのを助ける時であり、それまで純粋神道主義や儀礼的仏教、守旧的儒学で教育されてきた人々からの、雨霰と浴びせられる質問に答える時だった。その彼の、目には日々確かに、キリスト教に邪宗の烙印を押した勅令が未だ掲げられたままの高札が映っていたのだ。余談だが、後にその勅令が“当面無効”となった時、私はそれを手に入れて、伝道土産に米国への船に乗せた。

下條は宗教においてと同じぐらい、科学においても鋭敏だった。私は彼の援けが無ければ、化学と物理学の複雑なところを十分に説明することができなかっただろう。実験にそれほど難しく危険なものはなかったが、彼は私の傍に立ち、いわば“銃にかくれて”チャンスをつかむことをいとわなかった。私のテーブルの上に二枚の写真がある。一枚は最初のバイブルクラス、もう一枚は最初の化学実験室だ。勝安房が建ててくれたそのラボで、下条と私は綿火薬、ニトログリセリン、ダイナマイト、水銀爆薬、そしてアームストロング溶解混合物の準備段階的爆発物をつくった。以来最前線では、それら全てに改良された後継者が“あるそうだ”。もし我々のラボにおけるほど実際それらがエネルギー全開ではたらくのならば、その場にとり残されたロシア人のなからんことを！

下條が倒れたのは爆薬によってではなく、勉強のしすぎによってだった。今は東京の墓地で大きな石板が彼の墓所を示している。その板には、中村によって翻訳されたキリスト教の教義の要約が漢字で彫られている。中村自身が、静岡における私の最も親密な友人だった。彼はかつてイングランドに渡り、ロンドンで六ヶ月暮らしたことがあるが、彼によれば、その間キリスト教に関する言葉を彼に話した者は一人もいないと言う。彼

には岩倉使節団とともに世界を廻る話もあったが、私を連れて静岡へ赴き“聖典を探す”ため、それを断念した。彼はスマイルズの『自助論』、ジョン・スチュアート・ミルの『自由について』、そして『宗教の根本真理』という、後年に監督教会の総裁主教となった私の叔父が書いた本を翻訳した。また中村は政府にキリスト教の“審理”を求めて建白し、後に東京の“キリシタン坂”でバイブルクラスを始めるにあたり私も彼に招かれて行った、その地もまた教会となったのだった。中村の墓は下條の墓所から遠くない所にあるが、もっと近くにあるのが勝安房のまだ新しい石棺だ。中村の私への最後の伝言は、「不滅の世界における、君の未来永劫の友人」としてだった。

過労のもう一つの例が、下条の墓から遠くない所にある畠山の墓だ。彼はかつてニュージャージー州ニューブランズウィックの学生だったが、キリスト教徒となり、その地でオランダ第一改革派教会の一員となった。彼は帰国して帝国大学（訳注：開成学校）の校長に任命された。その当時、1873 年に、私が東京赤坂にある皇帝の宮殿において、ミカド陛下に諸外国について進講した際、私の助手兼通訳を彼が務めてくれた。過労で亡くなった（それは不幸にも私の予言通りだったのだが）彼は、堂々たる神式で埋葬された。思考と労苦の数世紀に渡る知的成果を一日にして得る大望を抱き、その志に殉じた日本人学生たちの悲しき名簿、この国と彼らの母国におけるそれは、実に長い。

愛国者たちの献身と尽力、その英雄たちはまさにポート・アーサー（訳注：旅順港）の犠牲に匹敵する。勝安房の実の息子、アナポリスの海軍学校に学んだ彼もその一人であり、ニューブランズウィックにある七、八の墓が語るのもまた、同じ物語である。

勝安房が私を静岡に送り出した時、彼は私が攘夷党の温床に身を置くことになるのだと十分に分かっていた。知らぬが仏、私はその事実を一度ならざる銃撃によって初めて悟ったのだった。過度な警告の代わりに彼は、徳川家の衛兵を半ダース、昼夜我が寺の門の見張りにつけた。「すぐに駆けつけられますから」彼は静かに言った。だが、1896 年に彼は、実は当時私の身の安全について彼と大久保知事がどれだけ心配していたかを率直に語った。静岡にいた頃、周りに二本差しの“時代遅れ”のサムライたちが何十人も群がる中、彼らの赤い鞘がどうにも思わせぶりで、馬上そばを通り過ぎる時はいつも、どうにも首の辺りが“むずがゆかった”ものである。

それは過渡期の新時代だった。佐久間象山は外国人教師の任用を権威筋に進言しただけで暗殺された。オルバニーにおいて私の生徒だった香月は、自藩をコリアとの決裂に向かわせようとして佐賀で首をはねられた。次の犠牲は他でもない、香月とその共犯者十一名の斬首を命じた大臣大久保が、“時代遅れの”暗殺者の手にかかったのだった。

私の友人大久保一翁は、東京の知事となって静岡に私を残して去る時、鋼の長剣を形見にとくれたのだったが、剃刀のように鋭いその刀は、三百年にわたって彼の家に伝えられてきたものだった。勝安房も、彼が徳川海軍の提督だった頃に身に着けていた短刀（ハラキリ）を贈ってくれた。彼からはまた親愛の印として、錨の印章のある金のリングももらっている。

勝安房の短剣を私は常に、（縁起物として）枕の下に置いている。顔を剃れるほど鋭い長剣の方は、実際にそうしたらどうなるかをまさに暗示していた、あの赤い鞘の刀を思い出させるものだ。

彼はその種の物事に十分通じていたけれども、佐久間象山と違い私用では決して洋装せず、夷人風に髪を切ることもなかった。にもかかわらず彼は、幾度となく命を狙われた。彼が地方に、国の内奥にある封建制度の要塞へと、最初の外国人教師二人を送り出すという許されざる罪を犯す以前でさえ、そうだったのだ。その二人というのがすなわち、福井における将来の『ミカドの帝国』の著者と、静岡における私だった。

その地で私は、勝安房の身近にあって、また彼が皇帝の枢密顧問として召喚されて私の元を去った時に、知ったのだ。彼本人は徳川二元体制が生んだ、最後の見本といえる人だったのだと。外国人にとって謎だった、あの体制こそが、近年世界を驚かせている外交的慧眼と軍事的成功の、真の基礎なのである。世界は最初、何か暗黒の大陸が“開かれた”とでも思っていたのだったが。

第二章　勝安房の若き日々

この章では勝安房個人が関係した出来事をいくつか概観したい。－その出来事それぞれに引き続いた危機を、彼は自らの手に余るものとはしなかった。

最終的に帝国が統一を遂げる上で彼が世に示した政治的辣腕から、彼は“日本のビスマルク”と呼ばれるようになった。だがドイツ連邦の場合は、血腥い普仏戦争の外圧をくぐりぬけてはじめて達成されたという相違がある。ドイツの統一が宣せられたのは、セダンの後、まさにヴェルサイユにおいてだった。勝安房の方には、セダンはなく、征服者の辱めを受けたヴェルサイユもなかった。徳川慶喜 Tokugawa Keiki 勢の軍事的降伏は、ただ勝安房の助言によって、自発的に、愛国的に、即座に行われた。

さらにそれは、その身を棄て、自らを犠牲にする一手によって、国民の統一された姿をしっかりと手にしたのだった。同じものを得るために、同じ“六十年代”において、米国は百万に届かんという命を失う闘争を演じた。地方に拠る不機嫌な分権主義は、日本でも、ドイツでも、アメリカでも、統一の“回復”を成し遂げるため、処分されねばならなかった。だが、それには一人のビスマルクが必要だった。その後ろにフォン・モルトケの銃剣が控えている者が。あるいは一つの内戦が必要だった。一人のリンカーンが暗殺され、その血によって成就の印は捺された。その同じ時、日本では、同じ局面に立った“ビスマルク”は、自らが軍法を鍛えられ、三世紀にわたる勇武を受け継ぐ二本差しの騎士道に支えられた身でありながら、一つの主義 *principle* の前に、自ら、身を屈したのだ。近代には他に例を見ない愛国的忠誠心によって、彼は主人である将軍に対し、おとなしく座を降りて退出するように告げた。その座には、再び姿を顕わにしたミカド陛下こそが昇り、統一された王国の皇帝として、前面に立つべきなのだと。

勝安房は我がリンカーンと同じく、微賤の身に生まれながら、自ら頭角を現したたたき上げの人である。

彼は 1826 年 1 月、静岡という都市に生まれた。（※訳注：正しくは 1823 年 3 月、江戸生まれ）将軍家封臣の家の長男である。父親が早くに隠居したことで、その頃“勝麟太郎”と呼ばれていた若者は、一家の長として世に認められることとなった。とはいえまだ十六歳であり、浪費家の父親は彼に借金しか残していなかった。こうして、この世において自らの人生を切り拓いてゆく運命の子は、早くに責任というものを担わされたのだった。「若いサムライとして、私が受けた最初の授業は」、彼が以前私に書いてくれた身の上話によると「剣の道だった。私の家は代々それを修練していて、私が弟子入りした師も江戸一番と名高い使い手だった。冬の夜に町外れまで行かされて、まず神社の前の石段に座って瞑想する。それから立ちあがって、長い木刀を振る。夜明けまで振る。仏教哲学のひとつに“禅学”というのがあるのだが、剣の極意を得るにはそれを学ばねばならないと師匠が言うので、広徳寺という寺で十九になるまでそれを学んだ」。

若い勝も剣道を家計の助けとしたが、あまり流行らないので、蘭学を始めることにして江戸に住む永井という日本人の先生についた。それは熱心に、勤勉に学んだので、随分進歩した。実際オランダ語の辞書をまるまる一冊、三部も書き写して、二部は本屋に売り、その代金を父親の債務の返済に当てた。ある時、親の債権者に支払いを迫られた彼は、ほとんど空っぽの財布をまさに腹蔵なく開き、なけなしの中身が床に落ちるのを見せて、寛大さを求めた。早くから、質素倹約のための方便の数々によってつましい家計を支えていたが、それでも勝は外国語の勉強だけは続けた。精力的に、忍耐強く、たゆむことなく。

このひどく困難な作業によってこそ、彼の後の成功の基礎が築かれた。なぜなら彼が医学について、また航海について、地図、海図、そして外国に関する事全般において、書物から得た知識はオランダ語によるものだったのだから。

外国人が何をどう考え、どう振る舞うかを知ることが、黄金の機会、まれなる学識となる時代だった。すでに人々も、大名たちも、外国の“夷狄”たちが神聖不可侵の閉ざされた日本沿岸にやって来るのではないかと心配するようになっていた。近代の語法で言うならば、“白き禍”の真只中にあって、招かれざる侵入者に関して得られる地理的情報の欠片、記述された断片的情報の全てが珍重されたのだった。勝はまもなく、異人に関する生き字引のようなものになった。つまり危急の際に、さあ今どう対処すればよいかと聴かれる相談役である。彼は将軍（大君）によって、外国語書籍の翻訳掛に任命され、次いでその部署の長となり、ついには長崎の海軍訓練校の校長に昇進した。この時三十二歳、その一年前にペリー提督が洋夷の船を率いて浦賀湾内に現れていた。

この時期はまだ、オランダ船のみが日本に来ることを許されていた。彼らは長崎にデジマと呼ばれる十二エーカーかそこらの小さな“特権”を譲与されていた。堀で内地から隔てられた土地に、オランダにあるようなしっかりした石造建築、倉庫群を持ち、狭

く短い通りを歩きながら、あの堤の国に自分がいる空想にふけったのかもしれない。

そこが、勝が最初の海軍訓練校を持った所だった。教官はオランダ国王が派遣した将校六名で編成され、生徒はおよそ四十名を数えた。この海軍校を勝は立派に経営し、自ら砲術演習を指導し、海軍将校としての名を上げた。送り出した卒業生には、後に世に知られた者たちもいて、その中には伊東提督や西郷大将も入っている。

1854 年、勝は神奈川の崖の上に立って、ペリー提督の船団を眺めていた。その船は風と潮に逆らいながら、黒煙のスカーフをたなびかせつつ江戸湾の奥へと進入してきた。彼が蒸気力をその目にした最初にして、最も見事な実演だった。彼は同行者に振り向いて言った。「風と潮に逆らって走る船を造る国民が、蛮族だなんてことにはなるまいよ」。

上陸部隊を連れたペリーの小さなボートが放つ曲射砲の挨拶を聞いた後、彼は付け足して言った。「こっちが彼らの目的を妨げようとしている時に、これだけの力も忍耐強さも共に見せられる国民だ。親交を求めてしかるべきだよ」。

ペリー遠征隊の一人で存命の方から、最近私が会って聞いた話によれば、“サスケハナ”と“ポーハタン”が最初湾内を進んで行くと、裸の漕ぎ手が櫂一本で操る平底舟（サンパン）の長い列が、船に大きな藁縄を巻きつけて、それで引き戻そうとしてきたそうだ。そこに、故意か偶々か知らないが、サスケハナの低くて太い汽笛の音が突然鋭く響き渡った。その辺りでは、それまで聞いたこともない音だったろう。サンパンの姿は瞬く間に見えなくなったそうだ。その紳士は私に、ペリーが上陸する時に彼が撮影した写真のオリジナルをくれた。私はその小さな複製を作ったが、他にも私の元には、この後勝安房が私のために建ててくれた、静岡の学校の実験室で撮られた写真がある。その二十年前に彼が長崎で管理していたものと同様の学校へ、私の身を置いた時の写真だ。この二枚目の方に、ペリーが「大君」への贈り物として持ってきた科学器具が写っている。元大君と共に静岡に来た物だ。－空気ポンプ、電気装置、模型の蒸気機関車、馬蹄型磁石、航海用磁針、気圧計、空っぽの瓶、等々。私は最初それらがどこからもたらされたのか不思議だったのだが、その重い真鍮に「米国の標準ヤード」、鉄と木の方には「米国の重さと長さ」とあるのを見つけて、ペリーが持ってきたものに違いないと分かったのだった。それらは私が“たまたま”見つけるまで、城門の一つの内に埋もれていた。

航海といえば、勝の人生における大事件が起こったのはそれからまもなくだった。勝は第二のコロンブスとなって、アメリカを発見することになった。実際彼はサンフランシスコまで、自身の大型船を帆走、いや汽走させた。1858 年－ペリーの上陸から大統領任期丸々一期分の後－アメリカと日本の間で恒久的条約が批准されることになったのだった。米国艦“ポーハタン”が日本使節一行を運ぶ船に選ばれた。（ついでに言えば、この大君宮廷から遣わされた一行、その中に“トミー”（訳注：幕臣立石斧次郎）もいたわけだが、彼らが馬上ブロードウェイを行くのを私は子供の頃に見ている。彼らのほとんどは、お箸の国に帰った後、“追放”されて静岡で私と共にあった）。

勝は、この日本使節団についての情報を得た時、自らもその一員となって航海者とし

ての腕前を試したい、と熱望した。船を帆走させて行けるところまでしか行けなかった彼が、サンフランシスコまで行って“世界を見る”ことができるのである。彼は将軍（大君）に願書を出した。彼の要望は即、許可された。

だが当時は、物事がゆっくりとしか進まない時代である。初めて日本の役人が派遣されることになったが、彼らは自国の礼服に身を包み、剣を差し、被り物をして、日本の実戦さながらの出立ちだった。だが大船の建造はそれまでずっと禁じられていた。間に合ったのはオランダで造られた、わずか 250 トンの蒸気船、その名は“咸臨丸”。長さ 162 フィート、幅 24 フィート、やっと 100 馬力で、載せた砲も小さいのが 12 門。勝はまだ若年だったが、東郷提督の近代戦艦“三笠”につながる、この小さな父祖の“艦長”に選ばれた。三十七日間かけて、不慣れな船員を乗せ、荒天にもまれながら、この小さな軍船はサンフランシスコにたどり着いた。使節一行にとっては幸い、彼らは米国艦“ポーハタン”に乗っての航海だった。彼らを“護る”のは勝の軍船だったはずだが！

この航海にのぞんだ勝の若き熱情を冷ますものなど何物もなかった。「あれほど輝かしいことはなかった」と彼は書いている。確かに彼には輝かしかったろう。実験航海の場として、彼は蒸気船・軍船の操縦を学んだ。大洋の広さを知った。彼と好奇心いっぱいのクルーが導かれたのは、サンフランシスコ、西洋の驚異だった。彼がその目にした唯一のアメリカの都市である。その頃の町の大きさは今の一割にも満たなかったが、若き勝の“軍艦”の大きさを考えれば十分であろう。彼らはとても友好的な人々に迎えられた。異邦人たちは、町の通りを、船渠を、砦を、灯台を、病院を、工場を、ガス灯を見せられ、劇場へ、教会へ、学校へ、汽車へと案内された。そうして勝の中で、“文明”なるものの理念は決定的に、元の形を失ったのだった。それは 1860 年 2 月、まだ我らが内戦の前であり、私が勝本人の招きによって日本へ向かうためにその町を発つ、十年前の事である。

私が最後に東京の彼を訪ねた時に贈られた、一ダースの小著からなる『海軍史』の中に、この先駆的航海について興味深い細部の描写があり、彼らは帰りにホノルルを訪ねた時にもやはり歓迎されたようだ。いま日本中で尊敬されている有名な教師、福澤もこの巡航に加わっていて、精彩豊かに当時の事を書き綴っている。この（コロンブス的な）経験が、若い勝と福澤の感受性豊かな心に及ぼした知的精神的影響、そして一人の政治家の才腕と一人の教育者の熱情がほぼ、この目覚しい航海から始まったと言えることは疑いようもない。

勝と福澤、後に彼らは静岡に科学学校を開き、その校長となった私は今日、日本の教科書において「新日本の教育システムの創始者」と叙述される三人の外国人の一人という特別な栄誉に与っているわけで、この二人には感謝せねばならない。福澤自身は官職に任じられる話を全て断り、指導者の仕事から決して離れようとしなかった。彼の生徒たちは政府の要職を占め、彼の仕事の素晴らしい証となった。勝もアメリカから帰国後、神戸の海軍カレッジの総裁に任命された。彼はそこで、後の陸奥伯爵、今日の伊東提督

といった、才質と影響力をもつ人々を指導した。彼はそこで、「彼らの好戦的愛国主義の愚かさ」を納得させた。近代型の防衛設備を築き、欧州の方式を導入することで。分かたれた将軍と封建君主たちの船団を統一し、大海軍とすべきと主張することによって。彼は陸海軍の仕事の組織化・集権化にあずかる部局の長として国家のプログラムを計画した。遅延はしたが、それから実現したことはそれ以上である。

1862 年 6 月、勝安房は江戸の海軍学校の総裁に任命され、8 月には海兵長官となった（文久二年六月操練所頭取、閏八月軍艦奉行並）。土佐の“激しい”タイプの愛国者、坂本が彼を殺すつもりの刀一振りを抱えて彼の家を訪ねたのは、その頃のことである。

家の主人の対応は親切だった。率直に自らの考えを語り、その政策を求めるべき理を話した。全てに説得力があり、坂本はすっかり気勢を殺がれ、訪問の目的を打ち明けると、勝に許しを請い、弟子にしてくれと頼んだ。以後彼は誠実な友人となった。宮廷が海軍力拡張の先進的プランを採用したこと、そして将軍自身が兵庫に来てそこを海軍基地に選んだことは、彼の努力による。坂本の来訪におけるようなかたちで生まれた友情は、長く続くものだ。幾分危険な方法ではあるが。

勝安房が私に語ったことがある。かつて同じように、二本差しのサムライ三人が訪ねて来たことがある。きちんとした身なりで、その名と共に丁重に伝えてきた来意は、彼を殺すことだった。一瞬の躊躇いもなく、勝安房は招かれざる客人が待つ部屋へ、丸腰で向かった。通常の挨拶の後、勝安房は静かに述べた。彼らが本意を果たそうとする前に、説明しておきたいことがあると。勝安房は冷静にして、勇敢にして、説得力があった。彼らの転向は、坂本同様に速やかだった。彼らは謝罪し、信の置ける友となった。もし彼らがその脅迫を実行に移していたならば、一人としてその場から逃走する者はなく、三人全員がその場で“ハラキリ”をしていただろう。勝安房にはそれが分かっていた。そして彼は彼の流儀によって、その誠意を示し、その代償を得たのである。彼がアメリカからの帰途、船上で最初に受けた知らせは、大君の筆頭閣僚“井伊”の暗殺だった。アメリカとの条約締結を理由とする、反外国人の水戸藩士によるもので、まさに勝たち使節団がその批准のために海を渡ってきたところだった。

第三章　勝安房が、軍事において、準備しておいたこと

今次戦争においてアウトルック紙の特派員が現地で見出し読者に伝えた、ある特有の事実について、私を含め何人かは昔日本にいる時それを覚った者がいる。あの国では、軍事に関して場当たり的に行われる事はないのだと。ジョージ・ケナン氏は言う。鴨緑江から、また大連から伝えられる配信が実にしばしば“as prearranged 手筈通りに”という言葉を繰り返していたことが、アメリカ人の印象に強く残ったに違いないと。

日本陸軍第一軍の戦略的用兵の全てがそのように描写され、同じ言葉がまた幾度となく、東郷提督によっても使われた。そして彼はまさに、勝安房が“prearranged 準備し

ておいた”船の梯子段の、最後のステップに足を乗せていたのだ。「“準備しておく”と言うことが何を意味するのか、今やっと私はそれを知る機会を持ったのだ」。そうケナン氏は書いている。「この一つの言葉に、あるいはそれが表すところの完璧に組織されたシステムにこそ、海上陸上における日本の成功の秘密がある、そう思えるがゆえに私は、今それについて述べているのだ」。この興味深い記事を書いた観察者は、こう締めくくっている。「私の驚きを想像してほしい。いま私が見ているその国民は、つい五、六十年前まで、中世の武器を使い、海ではジャンクに乗っていた。彼らは陶器に釉を塗り、磁器をこしらえ、小さな青銅の鋳物を作ったりしていたのではなかったか。そんな彼らが、大きなことを、大がかりにやってのける、そんな力をもっているなんて誰が考えただろう。彼らが立派な製鉄所を、大砲を鋳る工場を創り、13 インチの旋条砲を作り、軍艦を造り、巨大な乾ドックを建造し、一つの施設で一万五千人の熟練労働者を雇用し、外国人の援けもなしに、最も複雑で最も扱い難い機械さえ自由に動かしている。ー私の感情が驚きであっても、無理があるだろうか」。確かに！

だが、その古き“ジャンク”の時代において、同じくいかにもひ弱そうな勝安房が、上記の事共の先駆けとなる物を作り上げ、より大きな物が現れる“準備”を済ませていたのだ。神戸において、そして古き江戸において。1896 年、横浜の南の湾岸にある“横須賀”、海軍力の秘密そのものであるその地に私が足を踏み入れる許可をくれたのも彼だった。ブルックリン海軍工廠にあるような建造物に、私はびっくりした。そこに錨を降ろしていた白い艦隊（今はグレーだが）は、自国のものと変わらなかった。捕獲されたチャイナの戦艦“鎮遠”の艦上にも上がったが、それは私がそれまで見たこともないほど大きな乾ドックで修理中だった。小人にも見えるような日本人たちが、ずっしりと大きな砲塔をまるごと持ち上げて、器用に、あたかもチーズの箱でも扱っているように、そっと浜辺に降ろすのを見て『ガリバー旅行記』を思い浮かべた。誰がガリバーなのかは分からなかったけれども。彼らは 13 インチの砲弾が三十人のチャイナ人を殺した時に空けた穴を塞いでいたが、まるで古い漆のお盆を直してでもいるようだった。こうしてかつてのチャイナの手強い旗艦は今、東郷提督の艦隊の内にあって、これまた“準備”万端密かに修理を終えて、“バルト艦隊”を待ち構えているのだ。停泊している白い艦隊が静かに日を浴びている美しい姿を、どうしても撮影したいという誘惑には抑えがたいものがあった。だが私は、常に絶対服従している唯一の存在が命ずるまま、自らの名誉にかけて、私の 12×24ｍｍカメラを控室に置いて入ったのだった。

だが私が、“準備しておくこと”について本当の大きな驚きを覚えたことは、私が横須賀から戻った後に勝安房がくれた、彼の人生の素描の内にあった。そこで述べられていたこと、その策謀について、翻訳によって知ったことは近年の日本の歴史に照らし合わせても価値あるものだったが、実を言えば私はつい数日前にそれを読み、そう理解したばかりなのである。勝安房自身が署名した、この強烈に面白い物語について、一つの章の断片としてなどでは、要点以上のことをお伝えすることはとてもできない。極めて

重大な出来事を、自らの事として語る上で、彼自身が主要な役を配され、謙遜と慎み深さを交えて描かれている。その物語の輪郭をなす描線が時折見せる特徴的なタッチに、彼という人の本質が現れている。勝安房の前奏として連なる諸家の家名、それは 1600 年の徳川家をもって頂点を迎え、平和の楽節が“伏見の一件”まで続く。そこで徳川の部隊が殴り合いを始めたのが薩摩人であり、彼らはそれまで自らは動くことのなかったミカドの守護者として自らを任じていた。

政治的カオスの始まりだった。日本の門口で中に入れろと求める嫌われ者の外国人たちにより、カオスは二重化した。慶喜は江戸へ船を走らせ、すぐさま西郷がその都市へと軍を進めた。このミカド軍なる者たちの雄叫びは常に「大君を罰し、廃せよ」、そして彼が条約を結んでしまった「蛮族どもを追放せよ」だった。情勢はかなり危険なものだったが、勝の語り口は控え目だ。「不意に私が、最も責任ある立場に置かれた。徳川の長い家系を顧た。その権力をやむなく引き渡した後どうなるかも考えた。だが何よりも、平和を守りたかった。民を救いたかった。外国との関係を破断させてはならなかった。徳川家の最高権力、ただそのために思案している余裕など無かった。私が真に努め、仕えるべきは国全体に対してであって、それが私の本当の願いでもあり、私はそれに従った。手抜かりもあったし、私の手に余ることもあった。ひどい急場に知恵が回らない時もあった。その全てに、自分の非力を思い知らされた」。

その後の二十ページにわたって、彼の物語は“幕府最後の日々”の緊迫した場面の連続である。（幕府、徳川、慶喜、そして“大君”、ここではどれも同じことだ）。慶喜が戻った時の江戸は、1867－1868 年だが、興奮が場を支配し、荒れ放題だった。勝の言によれば「巨大な蜂の巣が壊れて野放し」の有様だった。この時期、彼の話では「江戸には 160 万以上の住民がいた。いっぺんに 300 人、500 人の数がお寺に集まってくる。それがあちこち 50 か所も。それで刀を振り回して、死ぬまで戦うと叫ぶのだ。徳川に同情的な封建諸侯たちは皆、いわゆる皇軍などというものは薩摩、長州という不平派の藩が皇帝の権威を借りて装っているだけで、これは徳川家を倒した廃墟の上に自分たちの主君をいただく新幕府（つまり大君制の一種）を立てようとしている反逆の企みだと公言していた。見通しは暗かった。慶喜は閣僚を集めて戦を評議したが、皇軍はもう箱根の峠まで迫っていた」。

慶喜が言った。「戦争を考えるのは辛い。数千の無辜の民が塗炭の苦しみをなめるだろう。だが、その方たちの意見はどうか」と。

「私は黙っていたが、慶喜が私の卑見を求めたので答えた。：浮くか沈むか、残るか果てるか、人力でどうこうできる状況ではございませんが、戦となれば、徳川家のために死ぬだけです。駿河湾（静岡の近く）へ艦隊を率いて行って、部隊を上陸させて敵を清水港へ誘い出します。そこで彼らの側面から、艦隊の不意打ちをくらわせてやります」。（これはまさに、後に東郷が大連港の作戦で用いたような by “prearrangement 用意周到”な戦術というものだ）。「それから戦艦三、四隻で摂津湾へ向かいます」。戦時の

勝安房がそこにあり、彼はなお語った。「西部と中部、地方間の陸海の連絡を断ちます。必要な場合、大坂市街を我が艦砲で灰にします。京都への供給基地機能を絶ってしまえば、後は落ち着いて様子を見ながら待っていればいいでしょう」。

これは確かに、私が彼を知って以来これまで聞いたことが無いほど好戦的な弁舌だ。もし実行されていたならば、双方数千が犠牲になっただろう。だがこれはまさしく、そのわずか六年前に我が国を内戦に導いたところのセクショナリズムと、同種のものではなかったか。その戦争をリンカーンは避けようとしたが、不幸にも彼は勝安房のようにはピースメーカーの仕事を果たすことができなかった。

勝安房という人の“よりよき、その心髄”が自らを主張したのは、一昼夜の討論の果てにおいて彼が、別の方途を提示した時だった。「我が心底を申し述べますが、いま関東の精神（＝戦争）は激しい感情にゆだねられています。もし我々が平和的意志を示すことさえできれば、ただ世を静めるために、民の幸福と安全のために、あえて我らが一身の権益・財産を犠牲として、武器と城までも引き渡し、徳川家の命運を天に委ねること、我らが同じ祖国のために、それができたならばその時、いったい我らを害する何者が世にありましょうや」。ペテロの福音書第三章十三節に、それはなんと近かったことか。「汝等もし善に熱心ならば、誰か汝等を害わん」。

「私の最後の忠言を、慶喜は認容した」。勝安房の話は続く。「だがそれをやってやろうなんて神経の太い者は一人もいなかったから、私がそのおそるべき任務を引き受けさせられた」。その託された仕事をいかに彼がやりおおせたか、この素描においては後ほど、ただ簡潔に不完全にしか明らかにされないが、それをミカドがどれほど評価されたかは、この小著の最終節において明瞭に示されるだろう。

勝自身がどれほど惑い苦しむことになったかを、知る者はその後もほとんどない。「勝安房が我らを敵の手に引き渡すというのならば、同じく我らは捧げ物として彼の者の首を落とし軍神に奉らん」それが彼の和平案に接した徳川家臣団の最初の反応だった。

「私の思いには一片の曇りも無かった」。少し後に彼は語った。「自分は正しいことをしているのだと。心は決まっていた。町に迫る危険から無辜の民衆を救えないのであれば、我々自身を最初の犠牲として供さねばならないと。私はそう考えて行動した。その月の十四日に、私は西郷を訪ねて、次の手紙を渡した。向こうの参謀連や、皇軍の司令部等々に宛てたものを」。（勝の原文後掲：1）

その会見で勝は西郷に言った。「あなたが無力な民を容赦なく手に掛けようと、もう心に決めてしまっているのであれば、こちらも気後れすることは決してありません。まあそうなれば、外国の笑いものですがね。この町を戦場にしないでくれるのであれば、その恩は私にとって、一身上も役儀の上からも、命を差し出せるものです。王政復古となった今、自ずと江戸は新たな帝国の首府となるでしょう。城をはじめとする諸々がそちらの物です。徳川家数百万石の土地が行政支出を賄えます。だがそれ以上に、我々は今国際紛争の只中にあります。力なき我が国が、インドをはじめ征服された国々の悲惨

な轍を、踏まぬよう心がけねばなりません。同じ一つの危険に直面する中で、内紛は愛国の和合に、助け合いに場所を譲らねばならないのです。諸外国は見ています。その時彼らは我々をもっと信頼し、親交の念を増すことでしょう」。

「西郷は直ちに、翌日を期して発せられていた都市侵攻命令を取り消した。私は単騎戻って慶喜に報告した。夕暮れ時、帰宅途中家の近くで三発銃撃されたが別に驚きはしなかった。幸い銃弾は頭をかすめただけで無事だった。反対派の言い分としては、勝安房と西郷を殺せば双方の邪魔な指揮官を除けるわけだった」。

「その後すぐ、私は横浜に行って英国公使のサー・ハリー・パークス、及びケッペル提督と会い、ここだけの話だと言って状況を語った。彼らは私の意図に心から賛成してくれたが、一件の懸案に言及した。キリスト教信仰のゆえに獄中にある者たちのことだった。私はすぐ、彼らの解放を命じた。皇軍がまだ着かない内に、徳川軍の部隊を神奈川に派遣して外国人住民の護衛に当てた。だが部隊の者たちの間では密かに、皇軍攻撃の了解が取り交わされていた。横浜が危ないと知った私は、部隊を撤収させ、地元に警察業務の協力を求め、英国公使と話して英艦“Iron Duke”の水兵を（秩序維持のため）上陸させる手筈を整えた。こうして皇軍もイギリスのパスポート発給無しには、この町に近づけなくなった。結果、秩序は保たれ、外国資産は守られ、江戸から避難していた数千の住民も無事だった。徳川の陸軍はフランス式に組織されていたが、海軍はイギリス式だった。両部門で両国の教官が公職についていた」。

「危機の中、フランス軍事顧問団の団長が私を訪ねて来た。「あなたの軍将校及び兵士たちは十分に訓練され、頼みとなる。未熟な皇軍との戦闘では必ず完全に勝利できると確信している。勝利を得た後の手札の方が、得る前よりも和平を容易くするものだ。先ず戦い、然る後に約定の条件を求めるべきだ」。彼は熱心に私に忠告した。そして箱根の峠を守るのがいかに容易いかを説き、それがあれば尚更江戸の、その三重の堀と、櫓と、頑丈な石垣を備えた城の守りが確かなものになるかを私に諭した。私はそれに対し礼を述べたが、彼はその助言を三度繰り返すまで江戸を去らなかった」。

「一方、我が海軍のイギリス人教官（トレイシー）は、私が置かれたひどくやっかいな立場にいたく同情し、数多く優しい言葉をかけてくれた。私はそれを今でも恩に感じている」。

「我が方の船団から密かに脱走して函館に向かったものがあった。後にそこで会戦があったが、さまよえる艦隊の二隻が“Stonewall Jackson”に沈められて片が付いた。江戸城で下された勅命は、曖昧さを残さない明白さで宣言している。「徳川家が、始祖家康以来、安らかに国を治めること二百年を超える。称えるべき、その事実に鑑み、ミカド陛下は忝くも家の存続と寛大な取り扱いをよろこんでお許しになった。慶喜は、その退隠、（静岡での）隠棲をもって、その死を免ぜられる」。

「城の引き渡しにおいては、王政派 the Imperialists があからさまに兵を率いて入城するのを避けられた。その間に、私が止めるのも聞かず艦隊が安房館山へ走った。呼び戻

すように王政派に言われて、私は安房に行き、彼らを引っ張ってきた。その半分は王政派の元にやったが、残りは函館に逃げた」。
「城の引き渡しの後、我が将校たちから、雲と散り脱走する数が数千に上った。この変わり目においてなされたことに対し、憤怒にかられていた彼らは、奥羽の諸侯と共に徒党をなし、以後皇帝の軍に対抗し連盟して事に当たった。それからいわゆる“上野の戦い”をはじめとする散漫な小競り合いがあり、最も美しい寺院がそれで破壊され、サムライたちが命を散らした」。
「後世の人が判断することだが」そう勝は語りを結ぶ。「あの混乱、混沌から統一と秩序をもたらすことがどれほど、困難な事だったか」。
「徳川末期の時代、戦に備える気も緩み、外国との通商が開かれ、不安が瀰漫していた。十年にわたり国が危うかったのは、人々がばらばらで、封建諸侯が互いに譲らず、最高権威にも疑問符がついてしまったからだ。天運のしからしむるところ、ついには明治の世を、国が一つとなる時代を迎えることができた。それは聖恩のおかげとはいえ、同じ祖国のため、その後生のために、一身を、家を、命を顧ることなく捧げた、本当の勇気ある者たちの行いなくしてはなしえなかったことだ」。
　この勝安房の後書きの補足として、マラトンからワーテルローまでを叙述する著書『世界の十四の決定的戦闘』におけるクレシーの前書きから引用したい。「逆の結果であったならば、その後の世界の歴史はまるきり違う様相を呈していただろう」。
　勝安房が皇帝にもたらしたものとして、城と艦隊、さらには至上権の復旧そのものの他に、その財庫に「復旧」させた四百万石の米がある。彼はその賢明な運用を忠告したが、何しろその他の点において新体制が前のものよりましになったとは言えなかったことは、「敵から百歩逃げた兵士を笑う、五十歩逃げた」兵士の寓話そのままだった。
「将来の世代は、これで満足してはならない」そう彼は言う。「過去の功業の上に安穏とせず、王政復古の先へと、飽かず進まねばならない。国が進歩し、軍事力を持つ、そのために広く深く基礎を固めねばならない。力を合わせて取り組み、極東における我が国の威信をまし、世界に自分たちの力を認められるよう、閑却することなく」。
「それが私の望みだ。自分の目で見ることはなくとも、それがかなうならば、斬首にも、どんな重い罰にも、私に怯む心などありはしない」。
「実際、上野の一件の時だが、攻撃を前にしてもばらばらの彼らは、国の脅威になどならないだろうとわかっていた。積み重なった怒りをわめき散らしていただけだ。烏合の衆は数を増やすほど、つぶされ易い。彼らの行いは、脅えた子供が顔を隠してすることに似ていた。その参謀の中に、王政派に艦隊を引き渡す企み全ての張本人が私だと言うものがあり、上野の戦いで事敗れた後、兵二百を連れて我が家を襲って来た。家に発砲した後、武器を奪って行った」。（勝の原文後掲：2）
「幸い私は留守にしていて、命拾いをした」。
「だが私は二人のプリンス（訳注：和宮と田安中納言）のところに行って、こう言った。

私が死に値する罪を犯したのであれば、帝国司令部において召喚し、首をはねてもらいたい。だが有罪と宣告されずにいる犯人のような扱いは、御免蒙りたいと」。
「そうしたら最高司令官は、一件に驚いて言った。その方の忠誠心に疑いなどないと。そして私の身を保護する手続きがとられた」。

後の 1872 年、新しい明治政府は故障なく動いてはいたが、霧も濃くなるばかりの外国交際という迷いやすい航路における信頼すべき案内人となるようにと、勝安房を隠棲の地静岡から呼び出すこと三度に及んだ。

新政府は、単に（まだ産着にくるまっていて）彼無しでは上手くいかないのだと、率直に彼に語った。だが彼らが得れば私が失うのであり、特に私の最も優秀な生徒たちが首都の公職にと引き抜かれ続けた。私自身も内地暮らしが二年半に及んだ時、勝安房の説得（というか命令だったが）に屈して東京に行ったのだった。

その時、彼は閣僚との日常的接触における戦術を修正したのだった。ある晩彼は愉快に目を瞬かせて私に語った。「学校の生徒みたいに扱わないといけないのがいるからね。叱りつけたら、次の日には誉めてやるんだよ」。

筆者がここで数点の歴史的事実について強調しているのは、データの由来が一方のみに限られることで、これまでほとんど理解されてこなかったことだからだ。物事の両側を一人の人間が一度に見られることはそうそうない。それができたことが勝安房を無二の存在としている。外国人の書き手からだけでなく、やっと現地の歴史家によっても遅まきながら彼は評価されるようになってきている。私がそれを認めた最初が、岡倉覚三氏の著書『日本の覚醒』（Century Co., New York, 1904）だった。その 24 ページにこうある。「徳川将軍体制がそれまでの体制と異なるのは、それが実質的に君主制だったことだ」。つまり、それが続いていれば今、皇帝は睦仁ではなく慶喜だったのだ。確かにそれが最初に使節を米国に派遣したのであり、ペリー提督と条約を結んだのもそれに他ならない。同著者は 160 ページで認めている。「後の伯爵勝安房こそ、最も信任された顧問官であり、統一派の指導者だった。慶喜公の他の家来たちが、決然たる連邦派（というか連盟派※）であった中で」。　※confederate 訳注：米国内戦の南部側

ところで、その慶喜公は今も静岡で暮らし、写真と鷹狩りを専らの楽しみとしている。かつて私は鷹狩りに彼とその鷹を誘ったことがあるが、やんわりと断られた。その時、彼は自筆の手紙に添えて、磁器の巨大な鉢を贈ってくれた。それは千ドルはするもので、八人がかりで運ばれて来たのだった。

私はその中に入った自分の写真を撮ったことがあった。そのせいで、使用人のサム・パッチがある日、私のため即席のバスタブにと、その中にお湯をはった。この平民的な仕打ちに耐えかねて、それは爆音を轟かせて砕けた。

掲載した彼の写真は、私が最後に静岡を訪れた時に勝安房の求めに応じて贈ってくれたものだ。親切に自筆も添えてくれた。彼の後継者であり、今は東京で貴族院議長をしている徳川家達公も、美しい英文の手紙を送ってくれた。勝安房の家で彼と食事をした

時、ロンドンで勉強したことを私に話した。(彼は最初の戦争基金に当時 50 万円を寄付した)。彼は徳川家の家紋と家禄を相続したが、その無二の地位と特権は皇帝の宮廷から法制によって授けられたものだ。勝安房邸での食事の後、もう遅い時間だったが、玄関前の庭先で勝安房と徳川公の“最後の写真”を撮ってもらうことができた。右の方で、手を組んでいるのが勝安房だ。

この穏やかな老紳士の姿から、彼が人生で幾度となく命を狙われながらぎりぎりでそれを免れてきたことを、また彼こそが、我々が満洲において目にしてきた、あの一身をなげうつ英雄的行為と愛国心を「先導した指標」であったことを、うかがい知る者はないだろう。この国の人々の勇気にみられる特質について、覚三の文章をそのまま引用しよう（173 ページ)。「死を軽んずること、我が国民が見せるそれが、ムスリムに見られるごとく、未来の報酬を当てにしてのものだと、そう思っている西洋人もいるが、そうではない。義務感、ただそれのみによって我々は、確かな死へ向かって進軍する。全ての背後にあるものは、主君への献身と、祖国への愛。－死と同様に、限り無きものとしての、愛である」。“維新”において、と彼は付言する。「サムライに剣を、大名に領地を、将軍に相伝の権威を、捨てさせたのものはただ自己犠牲の精神、それのみだった」。それを“先導”した者もやはり、勝安房であった。

彼こそが、この“転回”点の要だったのだ。

彼は今も常に非難の矛先にある。それは皮肉な口調でなされることが多いのだが。彼の微笑は真似の仕様がなく、彼の諧謔には逆らいようもない。何しろ人をからかうのが好きなのだ。私が皇居における立体幻灯機の御前実演に際し、軍楽隊を一隊借りたいと彼に頼んだことがある。送られてきたのはフルバンド二隊、総勢 60 名。ミカドの耳を聾するに十分な数だったが、それでも後で私は写真にある美しい贈り物をいただいた。

第四章　家庭における勝安房、その最期のキリスト信仰受容

日本人が近年科学においてみせたような革新を、キリスト教においてなすことはないだろうが、それを広める方法においては疑いなくなされることだろう。

彼らが求めるのはシンプルなキリスト受難の物語であり、シンプルで矛盾することのないキリスト教徒の生活によって例証されたそれである。彼らが必要とするのはまた、彼らの精神構造にふさわしい、奮闘的なキリスト教である。

すでに十六世紀において、フランシスコ・ザビエルはゴアに亡命していた日本人アンジローに訊ねた。キリスト教を伝えたとして、それを受け入れる国民なのかどうかを。

彼は答えた。真実についての理にかなった説教であれば、彼らは耳を傾けるでしょう。それを説く者の暮らしぶりが、その道義にもとるものでないかどうか、じっと見定めることでしょう。然る後、彼らは本物とわかったその宗旨を、その懐におさめるでしょう。

私は今週、金子堅太郎男爵から手紙を受け取った。彼はハーヴァード大学を卒業した

法学博士で、貴族院議員である。それはなんともいえずアンジローの回答と、まさしく響き合うものだった。日本が二十世紀に、とりわけ現下の危機において、証となるものとして望んでいるのは、十六世紀に望んだものと同じ類のままだとそれは示唆していた。「ペリーの出現以来五十年にわたり、我らは理を諭され、法を説かれてきました」。男爵は書く。「我らの転向のため、実に数百万ドルが費やされました。そして今、その高き理と深き法が、ついに実践の時を迎えました。なんという痛みであろう、我が兵士たちが日々、国を守るために惨たらしく倒れていく。寄る辺無き妻子を後に残して！こんな胸の張り裂けるような情況でただ“説教”が続けられるくらいなら、ラッパの音、シンバルの響きの方が確かにましです。かくのごとき悲しみに満ちた時になされる一つの手助けは、千の説教よりもはるかに大きな影響をこの先与えることでしょう。今後百年、二度とこんな機会が訪れることはありません。今この時に示されるキリスト教の人助けの力こそ、全ての日本人の心を確かにとらえ、決して忘れられないものとなるでしょう」。

この手紙および同趣旨のものに対する返答として、発せられたクリスマス・アピールの文言である。「今日日本で鞘から抜かれた剣、世界が前へ進むために放たれたそれは今、これまでもそうだったように、家族の生活を深々と切り裂いた」。「戦場で剣を交えている者たちを救えないとしても、苦しみに耐えている人たちの助けになることはできる。憐れみ深き赤十字の活動は世界のいずこにおいても中立であり、無力な子供たちが助けを求める声こそ、キリスト教の愛と施しがこたえねばならないものだ」。そして主の言葉が付言される。－我らの主、我らが仕える主であり、－はっきりと告げられていることである。「此等のいと小さき者の一人に為したるは、即ち我に為したるなり」。我らが座右の銘の末尾にあって忘れられがちな一節は「此等のいと小さき者の一人に為さざりしは、即ち我に為さざりしなり」。

これは警告だ。我らが主は示している。無視すれば歯噛みして歎くことになるだろう。これは直喩だ。高い源より私が受けてきた静かな暗示よりも、力強く私をゆさぶる声だ。それは告げている。この危急の時にあってキリスト教が実際に助けの手を差し伸べられないのならば、それは慈善を教える者たちを日本から撤退させることに何ら変わりないのだと。日本人と同じく、我々も今試されている。できるのか、できないのかと。

最近金子男爵はハーヴァード日本クラブで演説している。「まだ学校に通っている、ほんの子供がですよ、自分たちの本代に貯めたわずかばかりを、大蔵省に献金したのです。戦争は長く厳しいものになるでしょう。我々はそれをわかっています。ですから兵士・船員が前線に送られているこの時、その家族の面倒を隣人が、あるいは村が共同で見ているのです。この家族たちからは地代・家賃を取らないと、地主・家主たちは取り決めたのです。医者は彼らの病気をただで診ているのです。何千人という寡婦が、孤児が後に残されるに違いない。ですから国民自身が救済基金の組合を設立し、彼らの貧しい懐から、すでに 130 万円が寄せられているのです」。

「これは質的に、人種戦争でもなければ宗教戦争でもありません」。男爵は続ける。「日

本という国の、存在がかかった一戦なのです。アングロアメリカ文明が東方において前進できるのかどうかも、この戦いにかかっています。そして、アジアの平和を確保できるかどうか、それはいま我々の手にかかっているのです」。この危機において、ロシア人を“キリスト教徒”と呼び、日本人を“異教徒”と呼ぶことは、善きサマリア人の物語を真逆にするものだ。

そして、男爵は引用する。イェリコの町へ行って、盗賊の手に落ち、傷を負い、身包み剝がされて、血を流したまま置き去りにされた、ある男の物語を。神官もレビの人々も（傷ついた敵に対するロシア人の行いに似て）彼を「避けて通り過ぎた」。そこに現われる、蔑まれしサマリア人、すなわち“異教徒”の日本人が、馬から降り、彼に包帯を巻く。たとえ彼が敵であっても。そして語り手は、全くの真実を述べる。実際にキリストのような行いをしている人、“汝も行きて倣え”とのキリストの命に忠実な人こそが、隣人を愛する者、キリストが立てた旗の下に参じる者だと。敵軍の手に落ちた塹壕に残されていた、日本人負傷兵が受けた残忍な扱い。私の手元にある、その恐るべき報告からみてロシアのコサックを“キリスト教徒”と呼ぶことは、処刑台へ向かうロラン夫人が発した叫びを想い起こさせる。「おお、自由よ！汝の名の下に、どれほどの罪が犯されたことか」。これを、異教徒たる日本人の元で〔両軍〕の負傷兵が受けた看護と比べてみよう。その清潔な環境、施療の手際、疾病を免れ、回復率は近代における同種のいかなる統計と比べても遜色ない。Dr. L.L.シーマンの著書『東京から満洲へ、日本軍とともに』には、個人の客観によって得られた圧倒的証拠がそろっている。近代の戦史において、これほど賞賛に値する例を見ないほどに。日本のサマリタンはすべての“キリスト教徒”の競争者に優ったのだ。「善きかな、誠をもって仕えし者よ」、ここに主があれば、そう言われたことだろう。

日本が明らかに戦争を始めた、そう非難されることはあっても、それに先立つ年来の忍耐と自制を称えられることはあまりない。たとえそうでも、我々は“最初の一発”が済物浦港近辺で“Korietz”により撃たれたことを思い出さねばならない。サムター要塞において最初の一発を撃ったのは連盟軍だったのであり、日章旗に発砲した者が誰であれ、彼はその旗の陰にあった決然たる精神、そう、あの時も星条旗のためにと爆発のように現れた、あの精神を知ることになったのだ。

「主がそこにあったならば」。七十年代初頭、当時キリスト教に改宗した少数の日本人たちが、聖ヨハネ福音書第 17 章、聖書における伝道の成功全ての鍵になった一節を初めて知ることとなった。あの時、我ら帝国大学（訳注：開成学校）におけるキリスト教徒の教官たちは、きっと主が助言されたであろうことを彼らに伝えようと努めた、そう信じている。不安と困惑の中で、彼らは尋ねた。吹けば飛ぶような数の自分たちは一つになって、一つの教会をこの日本で組織すべきなのか。それともばらばらに分かれて各教派の師それぞれが説くところに、従って進むべきだろうかと。我々は助言した。「聖書の精神に従って進みなさい」、「これ皆一つとならんためなり・・世の信ぜんためなり」。

そうして彼らは横浜に一つの自国民の教会を、一致教会を建てた。まさにペリーが条約を交わした地であり、最初の寄付金千ドルが寄せられたのは、ハワイ諸島の日本人改宗者からだった。日本に降り立った旅行者は最初に、このしっかりと築かれた立派な石造建築を見て、キリスト教の一致を、その象徴を目にして知るのである。

その場所の近くで、かつてカトリックとロシア正教それぞれの信仰により収監されていた聖職者が、勝安房により解放されたのだった。また彼が東京から使者を送って、それが中村だったが、伝えてきた知らせを私が聞いたのもその近辺だった。「あなたは日本の壁を倒壊させた。今からあなたは両方教えることができます。科学も、キリスト教も」。そう使者は言った。私の契約書に日本の外務省が一つの条項（それは彼自身がアメリカに発送した原文書には無かった）を挿入したことを、勝が知った。私に三年間、キリスト教について話すこと、それを教えることを禁ずる内容であり、私はサインを拒否した。この抵抗により私は、容易ならぬ財政的窮乏に陥った。勝安房と岩倉（彼の息子たちと私はニューブランズウィックで友人となっていた）がそれを知り、二人の結合した影響力によって太政官が折れ、同意できかねる条項が取り下げられたのだった。

それから数年後、私は東京大学の法学および科学の生徒とともに、二つのバイブルクラス（私の自宅において、日曜のみ）を始めたが、その時も勝安房は微笑んで、私の勇気には感嘆すると、励ましてくれた。その時校長だった畠山は、穏やかに言った。「もちろん公式には許可できないことです」が、心得ているという顔で「どうぞ、おやりなさい。神のご加護を。私は外交術として、あなたのする事に目を瞑りますから」。

日本はその宗教史の最も暗い日々の中にあり、最も輝かしい精神の光は未だ日の昇る国から放たれてはいなかった。強いキリスト信仰にもとづく生活の、潜在的資質はあった。よろこんで聖霊がとどまる場所、その降臨節において“力強く吹きつける風の音に”驚くことができる場所を捜すならば、私は日本で捜し求める。聖霊の存在と力を私は、勝安房によって身を置くことになった仏教寺院の畳の上で、彼のお方のものである世界について教えている時にこそ、他のいかなる場所、キリスト教会の説教壇上や座席においてよりも発見できたのである。我が窮乏は神の好機である。神が我らを“綱の端”へ連れ行く時、そこに言語の困難と、厳しい試練と、危険が、我ら自身のゲッセマネの、より深き陰へと続いているかもしれない危険が待ち受けていた時にこそ、我らは彼を思慕し、彼を知る。彼が何者で、我々は何者に仕えているのかを。

ダイニッポンにおいてだけでなく、アメリカでも私は日本人の福音伝道者のはたらきによって、顕著な成功を得た。誠心からの信仰、熱誠あふれる弁舌、明らかに神と共にある彼らの姿が勝ち得た成果にはかなわない牧師も、我々の中にいるほどだった。日本は今日、聖霊の力がはたらく最も新しいフィールドだ。神は示すことだろう、人の子の間で彼がなしえることを。そして我々は驚くことだろう。

数年前、我が親友の Geo. C. ニーダム師が伝道で日本を廻った際、私は彼に、勝安房がひっそりと暮らしている家を訪ねてほしいと思った。彼を殺す為にか、その逆か、い

ずれにしろ、名のある人物が数多く来訪した家だ。私がニーダム氏に紹介状を送ると、彼はすぐ日本人の牧師を通訳に連れて訪ねて行った。

勝安房はその手紙を読み、信仰厚い客人を懇ろにもてなした。一時間が過ぎたかどうかの時間、彼はニーダム氏が語る福音書の真実に耳を傾けた。会見は短いものだったが、フィリポと宦官の会見と同じであり、（後の文章でお分かりになるはずだが）それに等しい効果があった。話の最後に、ニーダム氏は幾分ためらいながら勝に聞いた。膝まづいて祈りませんかと。勝はすぐ同意した。祈りを一節一節、日本人の牧師が訳した。膝を床から離して立ち上がった時、勝の目は濡れていた。彼は伝道者の手を握り、落ち着いた声で礼を述べた。人生で一番の恩恵に対して。日本人は滅多な事では人に感情を見せない。まさにその場所で、暗殺者にさえ恐れ気も無く向き合った男が、キリスト受難のシンプルな物語に屈服したのだ。かつて人が目にした真実が、人を救う神の力として認識された。

あまり知られていない事だが、勝安房の子息が結婚したミス・クララ・ホイットニーは故ウィリアム C. ホイットニー（米国人）の娘で、この人は Kaji という“舵”の意味の仮名をもち、勝安房の最後の求めに従って、孫の何人かが今この国で教育を受けている。この興味深い一家の母親から、今週私は一通の手紙を受け取った。同封された美しい写真には、六歳から十六歳まで、日本人でありアメリカ人である子供たちが並んでいた。掲載した一枚は上の子二人、それぞれ十五歳と十六歳である。もう一枚の方には勝家の“三世代”が、勝夫人を中心に写っている。こちらは私が老紳士自身からいただいたものだ。1895 年の饗宴の終わりに、異例で特別名誉なことだが、一家総出で彼は家族を私に紹介してくれたのだった。勝安房夫人は我が素描の主人公の誠実な妻である。上記の手紙が二人に言及している感動的な部分を、許可を得て抜粋させてもらう。

「本当に高貴という言葉が持つあらゆる意味においてそうだった、一人の人生についての物語が、首尾よく上梓されることを願っております。親愛なる老紳士を初めて知ったのは、私が十三歳の時でした。以来、その家族との本当に気兼ねの無い関係に私は支えられました。もちろん政治の、仕事のことは知りませんが、家庭では、彼を知ることになった全ての人から、深く尊敬される人でした」。

「伯爵はずっと私の親切な助言者でした。私の子供たちを心から大切に思ってくれました。私が米国に彼らを連れて来たのも、そう助言されたからです。きっと彼らは立派な人間になるだろう、そう私に言ってくれました。だって彼らは伯爵の親友だった Wm. C. ホイットニー、聖人のような私の父の、孫なんだからって」。

「勝家には四人の息子と三人の娘がいました。長男はアナポリスで学んだ人ですが、東京で亡くなりました。次男は小さい時に亡くなりました。四男が亡くなったのは最近です。夫は三男ですが、男系で残されたのは彼だけです。夫は大変名誉ある家名を負う責任を自らが負わないように望み（示された理由）、Kaji の苗字を名乗りました」。

「日本の長子相続制では、伯爵が亡くなれば爵位は失われます。そうならないよう、勝

家は亡くなった長男の代わりに、静岡にあった古い徳川の家系から、慶喜の子息である十二歳の少年を養子に迎えることにしました。それは昔仕えた主君に対する、老翁の最後の奉公だったのでしょう。家族はそれを、旧主に全てを捧げることを、忠義の人の人生にいかにもふさわしい、美しいことだと思ったのです。慶喜の子息が勝安房のはからいによって、彼の死後にその爵位と財産を相続する者となったのですから。勝安房の一番下の娘は目賀田夫人といい、夫は韓国の財政顧問です。他の娘たちは夫を亡くして実家で暮らしています」。

「私の子供たちは（六人いますが）、彼らの祖父とたびたび会って話し、彼とその国に信用される人間になりたいと皆思うようになりました。私のアルバムに伯爵が書いてくれた言葉があります。添えられているのは美しい詩で、お堀の泥の中に育ちながら、汚れなく芳しい花を咲かせる、神聖な蓮を詠んだものです。私たちだって美しく純粋な生き方ができる、たとえ環境がそれと正反対だったとしても、という象徴なのです」。

「お話に出ました、“勝安房伯語録”の収められた冊子ですが、それを編まれたのは東京のクリスチャン女学校の巌本校長です。主題を大変優しく美しく扱っていて、素っ気無い外見から気付かれないことも多い高貴な人格への、真実の洞察を与えてくれます」。

「今でもよく覚えていることがあります。“オーミソカ”の夜に伯爵はよく自分の身分を隠して、貧しい人の家を訪ねていました。新年の幸運を呼び厄除けとなる、餅というお菓子が変えない人たちです。彼はお金を入れた紙に封をして何も言わずに渡していました。お餅を買って少しおつりが出るぐらいの金額です。そうやって彼は、文字通り救世主に（そうと知ってか知らずにか）従っていたのです。“求める者に与えなさい”との命令に」。

「その家々こそ、今まさにあなたが手を伸ばそうとお骨折りになっている家庭です。彼と同じくあなたがその貴いお勤めを、果たされることをお祈りしています」。

「私の心は今、この恐ろしい戦争で父親をなくした、数千の貧しい小さな子供たちの元にあります。私たちが彼らの助けになれたらと、願っています。全ての国の寡婦と孤児のために、神の手が差し伸べられんことを」。

「伯爵の情け深さは全く上辺の物ではありませんでしたから、手持ちのお金をみんなあげてしまうこともたびたびありました。そんな時でも静岡から貧しい学生がいかにもという様子で家の門をくぐって来ます。そうしますと彼は紙に何か格言のような一文を書いたり、絵を描いたりして渡すのです。それを売って用を足すようにと。彼の書いた物ならそれだけで常に五円（＄5）の値が付きましたから」。

「自分に害をなした人に対する度量の大きさには、ただ驚かされました。決して仕返しせず、笑って見逃すのです。災難にあっても、怒ったところをみたことがありません。よく覚えていますが、家で雇っている人力車の車夫が不注意な人で、宮殿の近くの下り坂を駆け下りて荷車とぶつかり、伯爵が車から投げ出されて、ひどいけがをしたのです。それなのに腹立ちも現さず、ただ笑っているだけでした。私たちがその車夫をくびにし

た方がいいと言うと、“いや、これから役に立つんだよ。もっと注意しないとって、これで学んだんだから”って」。
「もし伯爵の素描をより完全な形で世に出すことをお望みでしたら、私は喜んで書き添えます。彼が生涯連れ添い、信頼した人、その信頼に応えてみせた真実の御方、あの美しく誠実な奥様への、感謝と尊敬の念を。彼女が話してくれた人生は、ロマンティックな中世の物語のようでした。彼女の有名な夫があれほどに輝くことができたのは、何が起ころうとも彼が信頼し切っている彼女が家庭にいてくれたこと、それなしにはありえなかったとしか私には思えません。私にとっては日本の小さな義理の母、日本女性の持つ素晴らしい特質を全て備えながら、その欠点は一つも持ち合わせていない人です。私の（アメリカ人の）実の母が亡くなった時、その小さな女性が私の所に来て、ーそう、その時の私はただの一人の子供でした、寂しくて、悲しくて、ーそんな私の肩に優しく手をおいて、言ってくれたのです。「あなたのお母様は神様の元へ行ってしまった。でも、これから私が、あなたの母になりますからね」と。そうして私をぎゅっと抱きしめてくれた、あの時から私は、自分にはもう一人の母がいるのだと、そう思っています。それでもその女性は、私もわかっていますが、“異教徒”と呼ばれる人なのです！」
「もう寄る年波で彼女も体は弱くなっているとはいえ、愛情と優しさの暖かい心の火ははっきりと、確かなままです。長い付き合いになりますし、もう彼女のことを完璧に近い人だと思ってしまっていますから、そんな私自身実は、『私が愛する女性』という、彼に劣らぬほど尊い一つの人生についての小著を著す誘惑にかられたりもするのです。大切な義理の父母のことを話し出すと、もう感情が溢れだして、いつまで止まらずに続くのか自分でも本当にわかりません。特に、老紳士のことをとてもよく知り、とても愛した、あなたのような方を相手に話してしまうと」。
「勝安房伯爵が亡くなる一、二週間前、兄は彼の口からはっきりと聞きました。自分はキリストを信じているという告白を。嬉しかったです。私たちは皆、彼が神の王国から遠くにあったことなどないと思ってはいたのですが。以前にも（伝道者ニーダムの来訪後）、キリスト教について愉快そうに話すことはありました。特有のユーモラスな調子で、こう付け加えるのです。信仰を公に告白しようなんて、とても思えない、だって宣教師に駆り出されて“年中説教させられる”なんて真っ平だよって。そんな最後の日々の彼は仏教徒ではありませんでしたが、仏式の葬儀は心を打つものでした。国葬でしたから、家族は何も口を出していません。急逝でした。私も参列しました。家中の人間が、泣き叫びました。（私はそれまで、日本でそのようなことがあるなんて知りませんでしたが）その慟哭は今も、私の耳に残っています」。
「父母を亡くした日本の子供たちのため今お働きになっている、あなたに神の祝福を。繰り返しになりますが、それこそ彼がしていたことです」。

「深く心から、お届けします」。

“クララ・ホイットニー・カジ”

手紙にある「兄」、Dr. ホイットニーは以前米国公使館に勤めた人で、東京で最初の病院の一つを、勝安房の家の隣に建てた人である。ザ・トロント・ウェズレイアン・ミッションの Dr. マクドナルドは、私が静岡を去った後の旧宅の使用を勝安房に許され、そこにやはり最初の病院および診療薬局を設けた。勝安房の好意で提供された、まさにあの建物である。後にまた、その場所は日本で最初の自主財源教会に発展することともなった。結局のところ勝安房は、彼自身の道を行く宣教師だったわけだ。

勝安房はその晩年において再び、“双方”に同時に心を寄せることとなった。威海衛の戦いで海軍を指揮したチャイナの老提督が、その少し前に彼の元を訪れ、彼から“維新”時代の話を聞いていたのである。二人の老いた船乗りの間に、友情が生まれた。まもなくチャイナと日本の艦隊が威海衛で交戦した。勝の心に重くのしかかったのは、彼のかつての生徒伊東中将が一方を率い、チャイニーズの新たな友人が他方を率いていることだった。こうして彼は再び、刃を交える双方に心を寄せ、気がかりとせねばならなかった。彼に大いなる安堵をもたらす知らせがようやく届いたのは、チャイナの提督が二百人の将来ある若い士官の命を、チャイナの未来のためにも残さねばと降伏したからだった。

1899 年 1 月のジャパンタイムズは伝える。「勝安房伯爵が午後三時、入浴後異常な高熱を発して倒れた。・・本月 19 日夜に七十三歳で逝去した伯爵、“氷川の賢人”の死をあらゆる階級の人々が悼んでいる。この時代の最も傑出した人物の一人を日本は失った。微賤の家に生まれながら、彼は全く自らの意志と力によって、将軍政府の最重要人物にまで上り詰めた。徳川家の治世から、この明治の世への平和的転換を完遂させたのは彼である。将軍慶喜に対し最も大きな影響力を発揮した彼が、もし忠義の道を誤って、皇軍に対する徹底抗戦を進言していたならば、維新はたとえ成し遂げられたとしても、多くの災いと流血をともなうものとなっただろう」。

「彼の死により」、ジャパン・マンスリー・エヴァンジェリストは書いている、「日本の政官界において最も畏敬された人物が失われた。この高潔な政治指導者は、日本海軍最初の艦長となり、日本史上最初の海軍カレッジを設立し、また最初の海軍大臣に任じられた人である。彼の賢明によって、今上皇帝陛下の元に統治権が回復された。つまり、その賢明がなかったならば“ミカドの帝国”など実現不可能だったと言っていいだろう」。

「そう認識されたことで、後年勝安房は貴族、伯爵となり、枢密顧問官となり、死の一ヶ月ほど前には皇帝は、旭日大綬章をもって彼の身を飾ったのである」。

「ミカドは葬儀費用一切を支弁するため、3000 円（＄3000）を下賜した。また侍従長を遣わして花と菓子と錦の反物三巻を遺族に贈った。（これは儀礼用の贈り物である）。式は仏式で行われ、簡素で、心に残るものだった。金額のほとんどは貧しい人々に配られた。不要に仰々しく飾り立てることは一切避ける様にと、伯爵が厳しく言い残していたからである」。

ミカド陛下から遺族に以下の弔辞が送られた。

「徳川が国の政柄を執っていた時代の最後に、故人は驚くべき先見の明をもって、国家防衛のため海軍の創設にはげんだ」。
「“維新”のとき、故人が旧主徳川に建言したことにより、それまで委任されていた権力が平和的に引き渡されることとなった。多くの重職を歴任する間も、故人は常に過去に優る誠意をもって努め続けた」。
「今その訃音に接し、朕は深い悲しみに沈んでいる。侍従長を遣わし、今は亡き大切な臣下の家族に、哀悼の言葉と下賜品をここに送る」。

“睦仁”

（おわり）

現代ダイニッポン史上最も高貴な人物の一人のシンプルな素描を
日本のこどもたちへ捧げる。
彼らの中にいる、昔私が教え、今も記憶の中で、希望の中で、その全員を愛している、こどもたちの“シズオカーセンセイ”、“クラークーサマ”より。
1904 年、クリスマス。

第三章における「幕府始末」引用原文（勁草書房『勝海舟全集』より）
1　もし官軍、果たしていま、我述ぶる所を聞かず、この策を挙げて進まば城地灰燼、無辜の民死傷する数万。ついにその遁るべき道をしらず。彼この暴挙をもって我に対せば、我もまた彼の進むに先だち、直ちに市街を焼いてその進軍を妨げ一戦、焦土を期せずばあるべからず。この心、この策を定め、後、彼に逢対、誠意をもってせざらんには、恐らくは貫徹なしがたからんか。我この事に任じて、一点疑念を存せず。もし百万の無辜を救うにあらずば、我まずこれを殺さん。（英文は意味がずれています）。
2　我、奥羽の形勢を聞きひそかに思う。「東方奥羽の侯伯、軍を発し、同盟し、もって官兵に抗すといえども、その称道揚言する所、わずかに小節目に過ぎず。かつその藩内分裂す。またこの大衆を率いるに適当なるの将師その人無し。焉んぞ、国家の安危に関せん哉。ただその積憤を発露するに過ぎざるのみ。故に合同する者、多くは解散、ますます早からん。大いに思慮を労するに足らざるなり」と。　官軍中、四、五輩を除くのほかは、徳川氏士人の、万事その指命を拒まざるをあなどり、これを軽侮し、その為す所往々鬼面を装して小児を脅かすに類す。ある参謀某は、我が兵の脱走し、軍艦の令に応ぜざる如き、みな我隠然、謀る所なりと憶測し、ついに五月十六日、官兵二百をもって我が第宅を襲い、発砲して侵入し、武器その他を奪掠す。（以上の通り、彰義隊が壊滅した翌日に勝邸を襲ったのは官軍です。また勝が「国家の安危に関せず」としているのは奥羽諸藩のことです。クラークの英文ではいずれも彰義隊のことになります）。

※2020 年のアップロード後、村瀬久代氏の訳文(2010)参照により数か所の明らかな誤訳に気づきました。御礼申し上げます。（2023 年改訂）